診療記録を作成するということ

病院長 小 阪 真 二

スポーツ選手には記録に残る選手と記憶に残る選手があると言われます。記憶に残る選手として現日本ハムファイターズ監督の新庄剛志氏が挙げられると思います。彼の現役時代には、敬遠の投球をさよならヒットにしまったりする破天荒なプレーとその奔放な発言が相まって、とても印象に残る選手でした。また、日本ハムの監督になってからの発言、パフォーマンスも目立っていたのは皆さんもご存じでしょう。しかし、彼の選手時代の成績を振り返ってみると、打率3割を超えたこともなく、本塁打も28本が最多と、記録的には普通の成績です。

私たちが行っている実際の臨床においても記憶と記録が一致しないことがしばしばあります。術後合併症でとても苦労したとか、難しい手術でなんとか助けられたなど記憶に残る患者さん、手術などがあります。しかし、患者さんにとって一番大事なのは、普通に特に合併症なく退院していくことです。これらの症例は記憶には残らず、忘れ去られがちになります。そのような症例に光を当てるのが、症例をまとめた臨床研究だと思います。

これらの過去の症例をまとめるにあたって大切になるのが、診療記録です。診療記録については、医師法第24条に「医師は、診療したとき遅滞なく診療に関する事項を診療録に記載しなければならない」とされています。そして、診療録は備忘録ではなく、正式な文書と規定されています。偽造や後で虚偽の内容に書き換えた場合、国公立病院の診療録であれば、公文書偽造、変造、同行為として刑罰の対象となります。それ以外の私立病院の場合でも私文書偽造、変造、同行為とされます。

紛争が起こる前に作成されることが、法律で義務付けられており、専門家による職務上の報告書であることより、診療記録は裁判等による証拠価値は極めて高いと言われてしています。紛争前に作成された診療録は、書証（文章により人の意思、判断、感想等が記された文書）として証人の証言よりも証拠価値が高いとされています。

現在、診療記録開示ガイドラインでは、「患者が患者の診療記録の開示を求めた場合には、原則として開示しなければならない」とされています。患者さんはいつでも自分の個人情報としての診療記録を見る権利を有しているのです。それゆえ、診療記録に個人の偏見的感想を書いてはいけませんし、患者さんに誤解されないような簡明な記録が必要となるのです。

そして、診療記録は、その診療を詳細に記録として残すことにより、臨床研究、医学教育に使われ、診療の質を上げることができます。また、前述したように、裁判の証拠能力から、自分たちを守ることにもなるのです。時間がなから診療記録が書けないというのは、自分を危険にさらし、後進の教育にも悪影響をあたえます。ぜひとも良質な診療記録を作成するようにしてください。